

令和元年度アーバンデザインスクール後期第2回実績報告書

(1) 開催日時

令和元年12月20日（金） 18時30分～20時

参加人数：19名

(2) テーマ

小さな空間から都市をプランニングする

「民有地をまちに還元する／余地でつむがれる地域の意図（北加賀屋＋奈良町）」

(3) 話題提供者

白石将生（昭和株式会社 関西技術室上席主任）

南愛（生駒市役所都市計画課）

片桐新之介（合同会社 C.SSS コーポレーション代表）

(4) 話題の概要

- 今年出版された『小さな空間から都市をプランニングする』（学芸出版社）の著者のうち8名によるシリーズ講義として、武田史朗氏（UDCBK 副センター長・立命館大学理工学部教授）にコーディネート頂く。
- 第2回は、白石氏、南氏、片桐氏に「民有地をまちに還元する／余地でつむがれる地域の意図（北加賀屋＋奈良町）」をテーマに話題提供頂いた。
- 本シリーズ講義の目標
 - はじめから都市の全体を理論で構築するのではなく、具体的な空間での解を重ねた先に都市の全体を連想させるような方法について、シリーズ講義を通して追体験してもらおう。
 - 参加者との議論を通じて、草津の実際の空間の作り方を考えることで、大きな都市に与える変化の兆しを好ましい方向に導くような機会とする。
- 今回のテーマ
 - 北加賀屋と奈良町の事例紹介と、共通する以下の3つのキーワード。
 - ①ゆっくり時間をかける ②プロセスそのものを目的化する ③フォローアップ
 - 参加者各自が思う「よい都市空間」を語ってみる。

- まちづくりの **KEY①**「ゆっくり時間をかける」
 - まちづくりにおいては、対象そのものがダイナミックに変化する。価値判断や合意形成すら大きく変化することがある。
 - 変化を予測しつつ、変化に適応できるプランニングが求められる。
 - 歴史を読み解き、どう未来につなげるか。まちのポテンシャルを把握し、新しい時代やライフスタイルにいかに適応していくか。
 - 「やると決めたからやる」のではなく、「変化に合わせて見直す」という基本合意と、「町の歴史の理解と尊重に基づいた方向性」が必要。

- まちづくりの **KEY②**「プロセスそのものを目的化する」
 - プロセスとは、つまり働きかけである。まちづくりに関わることそのものが、まちの豊かさ。
 - 多様な関係者が関わることのできる余地をいかに「プランニングに織り込めるか」が大切。
 - ビジョンや計画は作成した時点で「現在」との齟齬が出る。「計画したら終わり」ではなく、働きかけ続けることが大切であると、関係者全てが理解している必要がある。

- まちづくりの **KEY③**「フォロワーシップ」
 - 行政の役割が変化しており、人口縮小や、多様性が尊重される世の中においてはミクロのプレイヤーの「自由度」を高めるほうが効果が現れる場合がある。多層なプレイヤーの活動を読み取り、計画に反映させていく。
 - 「計画する人」「そこに暮らす人」「ビジネスをする人」の時間軸（タイムスケール）は異なり、それぞれ約30年、40～50年、10年程度であるので、フォロワーシップの役割は大切。

- 北加賀屋の事例紹介 ～民有地をまちに還元する～
 - 大阪市住之江区北加賀屋は大正時代から造船業で栄えた町で、造船業が撤退した後、残された空間を活用して「アートの町」へ。
 - 更地にせず建物に暫定利用した事例といえる。
 - まちの多くの土地を所有していた千島土地（株）が造船所跡地のアートスペースへの活用や、クリエイターへの空き物件の安価な貸し出しを行っている。
 - 創造拠点として下記のような場所がある。
 - ・アート複合スペース「クリエイティブセンター大阪」
 - ・まちなか農園「みんな農園」
 - ・協働スタジオ「コーポ北加賀屋」

- ・元鉄工所の社宅をリノベーションした「APartMENT」
- ・築60年の文化住宅を改築した地域の交流拠点「千鳥文化」

● 奈良町の事例紹介 ～余地でつむがれる地域の意図～

- 世界遺産などの歴史的建築物、江戸時代～昭和の町家が存在する地域。
- 都市計画による高さ制限があり、広い空が守られている。
- 3つのエリアに分類
 - ・住宅街におしゃれな店が点在する「きたまちエリア」
 - ・創業支援など活性化事業が行われている「商店街エリア」
 - ・町家リノベーションが並ぶ観光地である「ならまちエリア」
- 保存運動が展開され、奈良市は「奈良町都市景観形成地区」を指定。
- 2007年開業の「もちいどの夢 CUBE」は創業支援拠点。観光地の中心で格安賃料で最長3年出店可能な店舗群。30店を超える独立が実現。
- 奈良町は、建築行為、商業行為、事業への制度的制限が少なく、空間的にも余地がある。(市民がエリアの魅力をつくっていく余地)
- 今あるものを大切に守っていく思いのゆるやかな共有。



(5) ワークショップ

- 「都市空間の魅力とは何か？」について、ワークシートにそって各自考え、数人の参加者にシェアしてもらった。
 - ①『あなたの思うよい都市空間』とは？
 - ・空間 or 場所の名称

参加者の意見 新世界界限、高槻駅前関大方向のペDESTリアンデッキ、天満の飲み屋街（駅北側）など
 - ・どんな人たちが

参加者の意見 行政、大学、JR、事業者とお客さんなど
 - ・どのようにその空間に働きかけてきた結果、その空間があるのか

参加者の意見 安心・安全のまちづくり、観光向上、地域との連携など

- ②『あなたの思う よい都市空間』について、これからその空間はどうなっ
てほしいと思っているか

参加者の意見 素敵なテナントの入居、もっとニッチな世界観、
多様な人たちの集まり、旧と新が共存できるまちなど

(6) まとめ

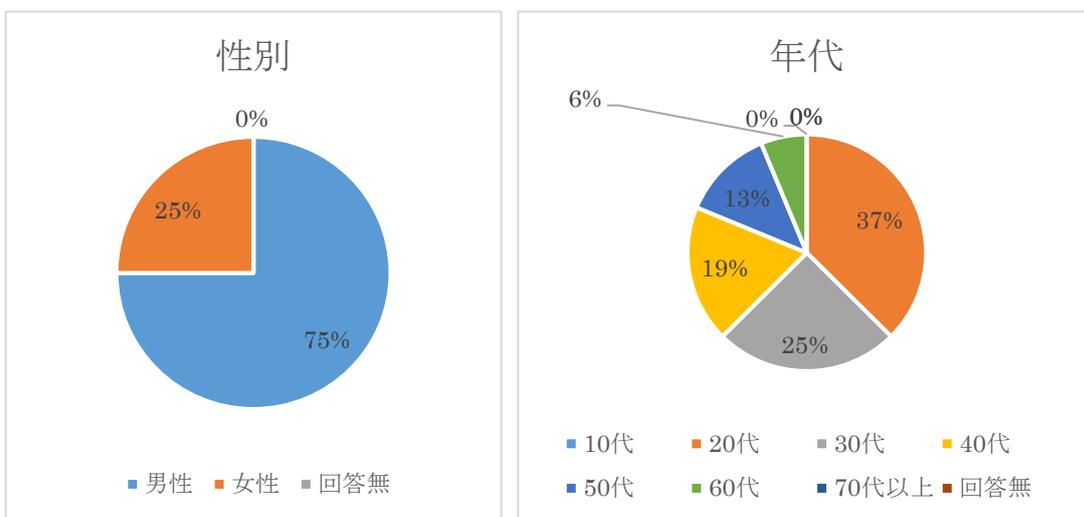
北加賀屋と奈良町のまちづくりに共通する要素について理解しながら、それぞれの事例の具体的変遷、制約、取り組みなどについて学んだ。

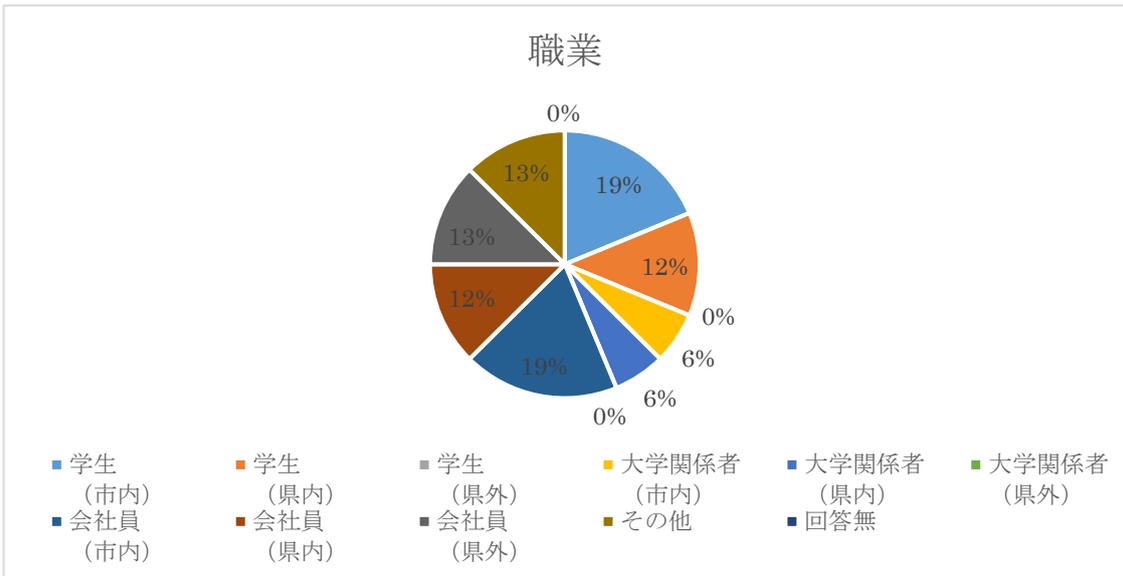
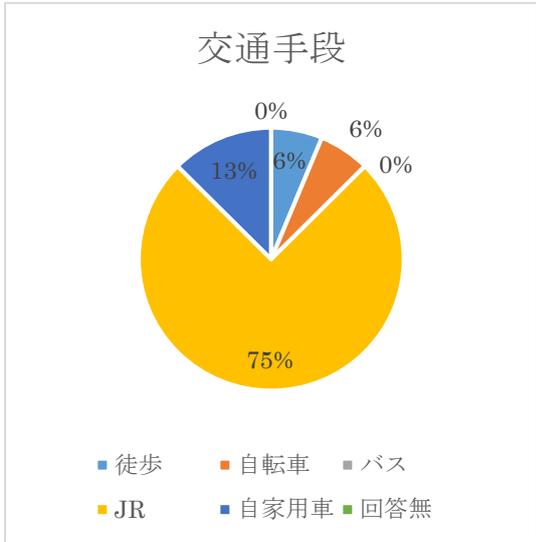
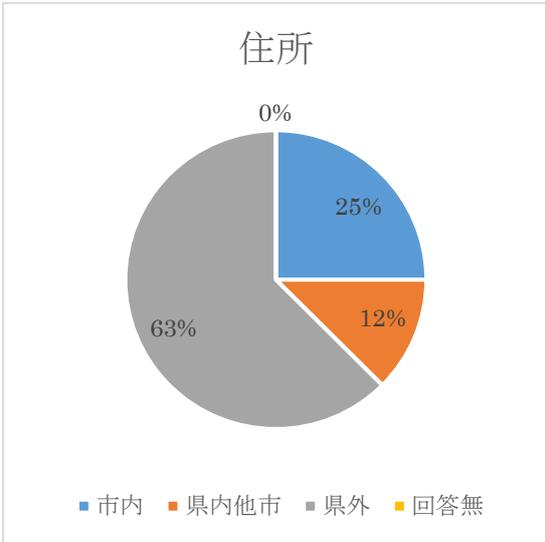
そのまちで思いを持って取り組む主体の存在と、主体を育もうとしたまちの眼差しは印象的であった。まちに働きかける主体の萌芽を大切に見出していくことは、どのまちにおいても重要なことなので、それぞれの持ち場で知見を活かすことが期待される。

(7) アンケートまとめ

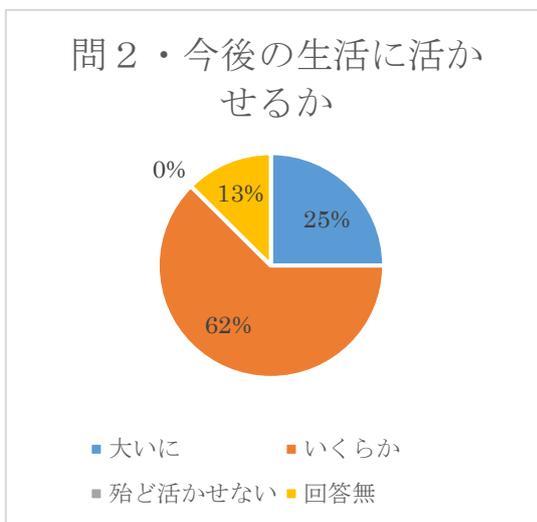
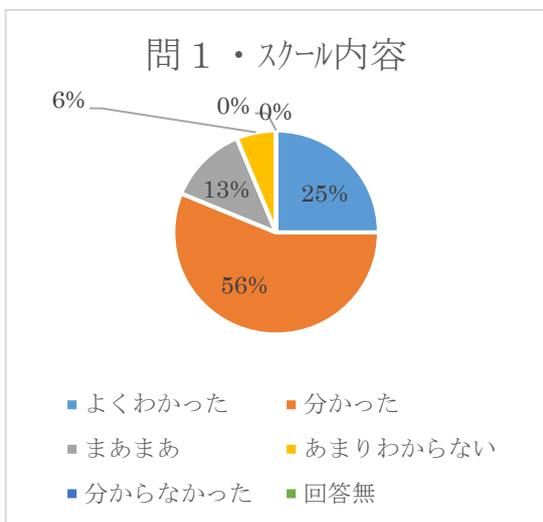
① 参加者属性

参加者19名のうち、アンケートに回答いただいた方は16名、回答率は84%だった。





② 内容について



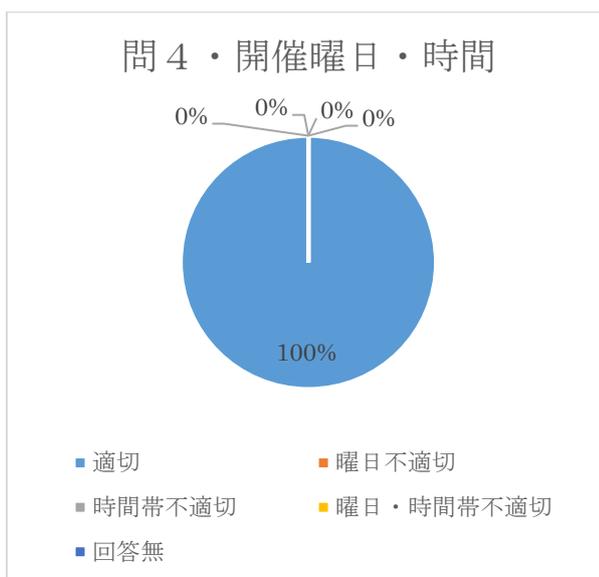
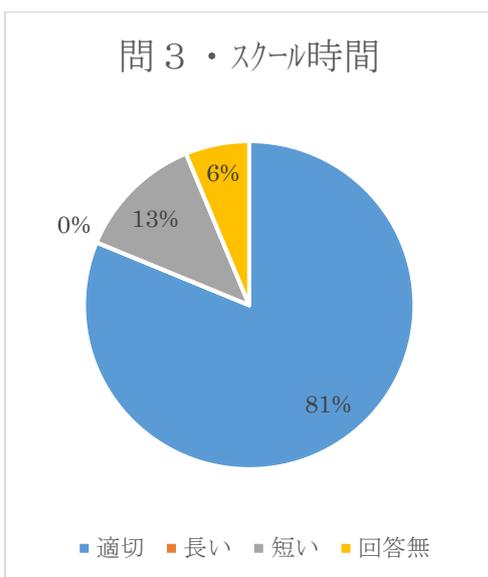
【自由記入欄回答】

問3. 時間はどうでしたか。

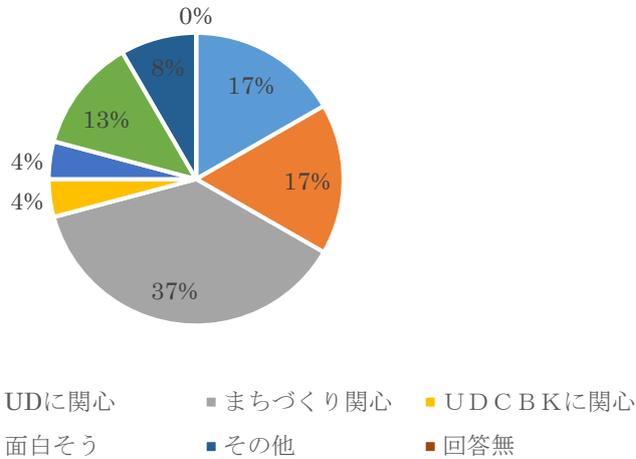
- ・ 2時間が適切 (50代男性)
- ・ 2時間が適切 (30代男性)

問4. 開催曜日、開催時間は適切でしたか。

回答なし



問5・参加動機



【自由記入欄回答】

問5. 今回参加した動機についてお聞かせください。それぞれに関心のあるテーマについて御自由に記載ください。

- ・公と私の間にもどのようにして良い共の場所をつくるかについて考えた（50代男性）
- ・南草津駅前の西口エリアを小さな空間として活用できないのかなと改めて思った。北加賀屋の発展は、広い土地と同一の地主がおられた事が大きいと思うが、小さい土地をまとめて活用するのは難しそうだなと感じた（60代女性）
- ・都市空間でオフィスビルと緑地との共存について（20代男性）
- ・縮小する都市と防災・減災対策（40代男性）
- ・まちのオープンスペースの活用について（20代男性）

【自由記入欄回答】

問6. 今回、印象に残ったこととその理由をお聞かせください。

- ・ならまち。時々行くところであり、レンタルスペースや様々な店ができてきているのを見て、どの様に今後変わっていくのかと思っていたので（60代女性）
- ・まちの歴史をくずさず長期的なスパンでまちの開発を行わないといけないということを学びました（20代男性）
- ・クリエイターが多い町で、クリエイターがまちを活性化させていくという話を聞いておもしろいと思った（20代男性）
- ・時間配分にもっと気をつければ、参加者の方々のWSがもっとおもしろくできたかと思いました（30代男性）
- ・北加賀屋まちづくりで、千島土地とクリエイターとの共有、支援が良くわかりました。逆に、大阪市（行政）とのかかわりはどのようになっているのですか？また地元住民と

の関係性はどうなっているのですか（40代男性）

- 色々な都市空間の事例を知れたこと。自分はこちらの出身ではないからそのような場所
が知れたため勉強になったから（20代男性）
- 本を一緒にかいた3人のコンビなんですね！めっちゃよいですね！（30代男性）
- ならきたまちエリアの店の話。私の所属していた研究室の友達が、きたまちはさびれて
いるから開発するんだといって卒制をつくっていたが、知る人ぞ知る店があるのだな
あと感じたため（20代女性）
- アパ art メントについて（20代女性）